リチャード三世像の変遷
―文学と歴史の狭間で―

【Ⅳ】

石　原　孝　哉

アンとの結婚とその死

Ⅰ

後世の人びとがリチャード三世を悪人として忌み嫌う理由のひとつに、妻アンに対するむごい仕打ちがある。夫を殺し、義父を殺した不倶戴天の敵と結婚した挙句に、最後は夫によって虫けらのように殺されてゆくアンが人々の共感を呼ぶからである。

しかし、これはシェイクスピア劇によって増幅された虚構の世界の話であり、資料をたどってゆくとまったく別の事実が浮かび上がってくる。本稿では、リチャードとアンの結婚とその死について、歴史から文学作品に至る過程について考察したい。

アン・ネヴィルは、キング・メイカーの異名を持つウォーリック伯リチャード・ネヴィルとウォーリック伯爵家の女子相続人アン・ビーチャムとの間の次女として 1456 年に生まれた。ミドラム城で過ごした幼少時には、一時期、リチャードと一緒に暮らしたこともあった。1470 年の夏に、父のウォーリック伯がランカスター派に寝返って、ヘンリー六世の妃で、ランカスター派の事実上の総帥であるマーガレット王妃と同盟を結ぶと、その証として、マーガレットの息子で皇太子のエドワードとアンの結婚が約束された。二人の結婚は、12 月

ごろであったとされている。父のウォーリック伯は首尾よくヘンリー六世を復位させたが、ヨーク派の巻き返しに会い、1471 年 4 月、バーネットの戦いで戦死した。翌 5 月 4 日、ヨーク派とランカスター派が最後の決戦をしたテュークスベリィの戦いで、ランカスター軍が敗れ、夫のエドワード皇太子が戦死してしまった。こうして 15 歳のアンはわずか五か月で未亡人になった。しかし、当時は、王族や有力貴族の子女が独身で過ごすことなど不可能で、翌 1472 年 7 月、グロスター公リチャードと再婚した。アンの姉イザベルは、すでにリチャードの兄クラレンス公ジョージと結婚していたので、王家の兄弟が伯爵家の姉妹と結婚したことになる。二人の間には， 翌 1473 年にエドワード・オヴ・ミドラムが誕生し、夫婦仲は円満であった。それから 10 年後の 1483 年、リチャードは国王となり、それに伴ってアンも王妃として戴冠した。この年エドワードも、プリンス・オヴ・ウエールズとなり、リチャード三世の後継者としての地位が明確にされた。しかし、期待の星エドワードは、翌 1484 年にあっけなく病没した。落胆したアンも、息子の後を追うように、1485 年 3 月 16 日に他界した。結核であったといわれている。

Ⅱ

シェイクスピアの『リチャード三世』においては、アンはまったくリチャードの野心達成の道具として描かれている。その結婚は財産と権力目当ての政略結婚であり、最後は、兄エドワード四世の娘エリザベスとの結婚をもくろむリチャードによって殺害される。

最初に、シェイクスピアから、アンの結婚にまつわる部分を見てみよう。リチャードがアンに求愛する場面は、劇の前半の大きな山場となっている。リチャードに夫ばかりでなく義父まで殺されたアンが、その殺害者でもある男の求婚を受け入れるという理不尽な場面で、演じるのにもっとも難しい役者泣かせの場面といわれている。

シェイクスピアでは、リチャードのアンへの求婚の場面が、ヘンリー六世の

死の直後に設定され、舞台には喪服姿のアンがヘンリー六世の棺を運ぶ葬列を率いて登場する。遺体を人々に公開したセント・ポール大聖堂から、埋葬のためにチャートスィーに移送するための葬列である。そこでは、アンが殺害者を激しく呪っている。

More direful hap betide that hated wretch,
That makes us wretched by the death of thee,
Than I can wish to adders, spiders, toads,
Or any creeping venom'd thing that lives!
If ever he have child, abortive be it,
Prodigious, and untimely brought to light,
Whose ugly and unnatural aspect
May fright the hopeful mother at the view;　(1)

「蝮、蜘蛛、ヒキガエル、いや地上をはい回るどんな毒虫よりも、もっと呪いをくれてやりたい」と、アンが呪うその相手は、「命を奪い、私たちを嘆かせた嘆かわしい人でなし」である。一見、ランカスター王家を打倒したヨーク家を漠然と示すように見える。だが次の部分で、「月足らずでこの世に送り出され、その化け物じみた醜い姿に、楽しみにしていた母親も、一目見てふるえおののく」と明言するにいたって、相手がリチャード個人であるということが分かる。

こうして舞台が整った所に当のリチャードが登場する。ところがリチャードが近づくとヘンリー六世の遺体が、なにもしないのに血を流す。これは、前節で触れたように、遺体は加害者が近づくと血を流すという、当時民間に流布していた俗信で、リチャードがヘンリー六世を殺害したことを暗示するものである。それを見たアンは、さらに怒りを増幅させて、ますます激しい呪いの言葉を浴びせかけ、ついにはリチャードに唾を吐きかける。復讐心をたぎらせ、激昂するアンの姿を見て、リチャードは命を賭した賭けに出る。

If thy revengeful heart cannot forgive,
Lo, here I lend thee this sharp-pointed sword;
Which if thou please to hide in this true bosom,
And let the soul forth that adoreth thee,
I lay it naked to the deadly stroke,
And humbly beg the death upon my knee.　(2)

たけり狂うアンに、自らの剣を抜いて差し出し、「この真心こもる胸深く突き刺し、あなたに憧れる魂を迷い出させたいと言われるなら」命をあげようと言って、胸を広げてひざまずくのである。この決死の行動に、アンの剣を持った手が震える。そこにリチャードの殺し文句が投げかけられる。

Nay, do not pause; for I did kill King Henry,
But ‘twas thy beauty that provoked me.
Nay, now dispatch; ‘twas I that stabb’d young Edward,
But ‘twas thy heavenly face that set me on.　(3)

「ためらわれるな、ヘンリー王を殺したのはこの私だ。だが私にそれをさせたのはあなたの美しさだ」と、ヘンリー六世を殺害したことをあっさりと認めながらも、その大罪を犯させたのは「あなたの美しさ」だというのだ。女心のすきを突かれたアンが一瞬たじろぐと、すかさずリチャードのことばの刃が突き刺さる。「さあ、はやく、王子エドワードを刺したのはこの私だ。だが私をその気にさせたのはその天使のような顔だ」。夫を殺したのも自分だが、それも天使のようなあなたの顔だというのである。

震えるアンの手から剣が落ちる。張り詰めた緊張が一気にほどける。燃え上がった憎しみのエネルギーは、この意外な言葉を聞いて霧消してしまう。こうなれば後はリチャードの思いのままである。坂を転がる車のように、アンは一気に結婚まで承知してしまうのである。

この場面は、シェイクスピアの名場面の一つで、命がけで求婚するリチャードを拒みきれずに、その愛を受け入れる女の性の悲しさや、おのれの野望を実現するためなら「理想の求婚者」にも変身できるリチャードのあくどさが見せ場である。シェイクスピアにおけるアンは、利用できるもののすべてを己の野心達成のために利用するリチャードの犠牲者として描かれている。これは、天才シェイクスピアが作り出した劇の中での話であるが、ここで芝居の世界から、歴史の世界に歯車を巻き戻してみよう。

最初に、シェイクスピア劇と歴史との時間的なズレを正しておきたい。すなわち、『リチャード三世』の冒頭におかれているクラレンスの失脚事件は 1478 年、ヘンリー六世の死は 1471 年であるから、順序が 7 年ほど逆になっている。また、リチャードとアンの結婚は 1472 年で、実際にはヘンリー六世の死の一年後である。しかしながら、演劇的な効果からいえば、クラレンスの失脚を一番前に置くことによって、リチャードの王位簒奪という野望が一層はっきりとするし、ヘンリー六世の死とアンへの求愛を同じ時期に設定することによって、一度ねらいをつけたら人の心まで奪ってしまうリチャードのけた外れの強さが、観客の脳裏に焼き付けられる。「怪物リチャード」のイメージを創り上げるのにこれほど効果的なものはないであろう。もちろん、シェイクスピアは歴史的事実を知らなかったのではなく、演劇的な効果を優先させたのである。

さて、リチャードとアンの結婚は 1472 年の夏月頃とおもわれるが、この結婚にはいくつかの障害があった。

話は一年前に遡る。アンの父ウォーリック伯と夫のエドワード皇太子が、相次いでこの世を去ってからおよそ半年後のこと、独身であったグロスター公リチャードが、エドワード皇太子の未亡人アンと結婚したいと兄のエドワード四世に願い出た。もとより、アンが相続権を共有する広大なウォーリック伯爵領を念頭に置いた政略結婚である。これを聞いておどろいたのは、兄のクラレンス公ジョージであった。彼はアンの姉イザベルと結婚しており、ウォーリック伯爵の所領のすべてを相続する腹積もりだったからである。そのために兄弟の間に不穏な空気が流れた。

アンとの結婚というテーマは、歴史的にはクラレンス公ジョージとグロスター公リチャードという二人の王弟が、事実上イングランドの北部を実効支配していた故ウォーリック伯領の相続をめぐって対立した極めて政治的な問題であった。ちなみにシェイクスピアでは、すでに指摘したように、アンへの求婚はクラレンスの失脚後に設定されているために、この問題はまったく無視されている。

最初に『クローランド年代記』を見てみよう。

> I should like to bring in here the quarrel which had arisen in this Michaelmas term between king's two brothers and which proved difficult to settle. After King Henry's son (to whom the earl of Warwick's younger daughter, the lady Anne, was married) had fallen at the battle of Tewkesbury, as already related, Richard, duke of Gloucester, sought to make the same Anne his wife; this desire did not suit the plans of his brother, the duke of Clarence (married previously to the earl's elder daughter) who therefore had the girl hidden away so that his brother would not know where she was, since he feared a division of the inheritance.　(4)

最初の部分で、「ここで私は、ミカルマスの時期に国王の二人の兄弟間に起きたいさかいについて触れておこう」と述べられているから、時期は 1471 年の 9 月から 12 月のことであるとわかる。以下、「ウォーリック伯の末娘アンと結婚していたヘンリー王の皇太子がテュークスベリィの戦いで戦死した後に」、「グロスター公リチャードがアンを妻にと望んだ」、「これはすでに伯爵の長女と結婚していたクラレンス公の意図と食い違った」と文章は続く。問題は次の、「それでクラレンス公は、アンを弟にわからないところに隠してしまった。クラレンス公は相続領の分割を望まなかったからである」という一節である。

ウォーリック伯領の相続問題はちょっと複雑なので多少の説明を要する。バーネットの戦いで、国王の首を次々とすげ替えた実力者ウォーリック伯リチャ

ード・ネヴィルが戦死し、広大なネヴィルの領地の相続が周囲の関心を集めていた。ウォーリック伯は反逆者であったが、その所領がそのまま国王に没収されることはなかった。その領地は、自身が父から受け継いだソールズベリー伯領と、妻アン・ビーチャムが相続したウォーリック伯領を合わせた広大なもので、この所領と夫婦とも王家につながる華麗な系譜ゆえに、キング・メイカーは国王をも脅かす実力者にのし上がったのである。ウォーリック伯が死に、妹アンの夫で皇太子のエドワードが死んだ今、一族唯一の有力な男子である娘婿のクラレンスがその相続を期待するのは当然であった。だが、そこにリチャードという強力なライヴァルが出現したのである。リチャードは弟でもあり、バラ戦争の第二次内乱で活躍してエドワード四世の信頼も極めてあつかったために、クラレンスといえども表立った妨害工作をするわけにはいかなかった。そこで、考えあぐねたクラレンスが、アンをリチャードに見つからない所に幽閉するという実力行使に出たのである。これで事件は一気に表面化し、大騒ぎになった。

おどろいたリチャードは臣下を動員して、八方手を尽くして探索に当たらせた。必死の努力が実って、ついにロンドンでアンを発見した。あわれなアンは、クラレンスの知人の家で台所女中に身をやつしていた。その様子を、『クローランド年代記』は次のように記している。

> The Duke of Gloucester, however, was so much more astute, that having discovered the girl dressed as a kitchen-maid in London, he had her moved into sanctuary in St. Martin's. (5)

ここから、リチャードが「ロンドンで台所女中姿の彼女を発見し」、「彼女をセント・マーチンの庇護所に移らせた」ことがわかる。頭の良いリチャードはアンを、ロンドンのセント・マーティンズ・ル・グランド教会の庇護所にかくまった。当時イングランド各地の教会には、一種の治外法権を有する庇護所があって、ここに駆け込めばたとえ国王といえども手が下せなかった。ダラム大

聖堂やウエストミンスター寺院は特に有名で、後者にはエドワード四世の妃エリザベスも何度か身を隠したことがある。

シェイクスピアでは、義父ヘンリー六世の葬列を導くアンを殺害者であるリチャードが強引に口説き落とすので、彼の鉄面皮のずぶとさが強調されるが、ここに示されているように、幽閉されているアンを見つけて救い出すとなれば、立場は逆転する。つまり、「アンとリチャードの美しいロマンス」になる可能性がある。未亡人とはいえ皇太子妃が、台所女中に身を落とされることは、身分制度が今日よりもはるかに厳格であった中世においては、信じがたいほどの屈辱であった。その苦境から救い出されれば、恩義を感じたアンが結婚を同意したとしても不思議はないだろう。少なくともリチャードに好意的な者はそう主張する。

だが、これには別の見方もある。アンは、「背が低くて、痩せて、のっぺり顔で、しかも片方の肩が高い」リチャードが嫌いであったために、彼と結婚するくらいなら台所女中のほうがましと考えて、クラレンスの説得に同意したというのである。(6)　アンが自ら進んで台所女中に変装したのか、広大なウォーリック伯爵領の独り占めを狙うクラレンス公ジョージの陰謀なのか、真相のほどは分からない。だが、階級や身分があらゆるものに優先した中世のイングランドの状況と、第２節で述べたようなクラレンスのその後の行動から考えれば、クラレンスによる監禁説をとるのが自然であろう。

アンとリチャードの結婚問題は、枢密院で複雑な法律論争になったが決着がつかず、最後は国王が仲裁に入って二人の結婚が認められた。後世の記録では、この結婚が、ウォーリック伯領を狙った政略結婚であることだけが強調されているが、この時点では、ウォーリック伯爵未亡人が健在で、領地の半分を所有していたので、アンに相続権があったのは全体の４分の１にすぎなかった。封建時代の上流階級の結婚は、領地の所有と支配権を伴う政治問題であったから、政略結婚であるという理由だけでリチャードを非難するのは当を得ているとはいえない。

それはともかく、このような事情で、結婚時にアンに与えられたのは、ウォ

ーリック伯の遺産のほんの一部であった。これは以下の大法官府の勅許記録簿で確認できる。

18 March 1472: George Duke of Clarence has surrendered a part of the grant of all castles, honours, lordships, manors and other possessions, late of Richard Earl of Warwick in his right of Anne his wife, at the king's request, to his brother Richard Duke of Gloucester. (7)

この文書から、1472 年 3 月 18 日、クラレンス公ジョージは国王の要請により、「妻アンの権利によって故ウォーリック伯リチャードが有していた、あらゆる城、名誉、領主たる権限、所領その他の財産の一部」をリチャードに譲り渡したことがわかる。しかし、最も重要なウォーリック伯位、ソールズベリー伯位などは長女の夫たるクラレンスのために留保され、所領の半分を占める母親のウォーリック伯夫人アン・ビーチャムの所有もそのまま安堵された。

それから二か月後、今度はリチャードがクラレンスに、宮内大臣の官職を譲っている。これは国王の側近中の側近が勤める職で、極めて重要なポストである。あきらかに、リチャードがウォーリック伯の遺産の一部をクラレンスから譲り受けた見返りに譲渡したものと思われる。

20 May 1472: grant for life to George Duke of Clarence of the office of great chamberlain of England, in lieu of a like grant of the office to king's brother Richard Duke of Gloucester, by letters patent dated 18 May 1471, surrendered. (8)

この勅許状から、宮内大臣の官職は 1471 年 5 月 18 日に、バラ戦争におけるリチャードの活躍の褒章として与えられたものが、1472 年 5 月 20 日に改めてクラレンスに与えられていることがわかる。このような事情を勘案すると、実質的なリチャードの取り分は思ったほど多くなかった。だが、一部とはいえウォーリック伯の遺産を相続し、アンとの結婚というもっと大きな果実を手にし

たリチャードは満足であった。

ともあれ、アンをめぐる兄弟のいさかいは一段落し、晴れてアンと結婚したリチャードは、ヨークシャーのミドラム城で新婚生活を送った。それから 1 年後の 1473 年、二人の間には玉のような男の子が生まれた。エドワードと名づけられたこの子は、その生地にちなんで「ミドラムのエドワード」と呼ばれた。新妻アンにとってはおそらく生涯でもっとも幸せな時期であった。彼女は夫に、母のアン・ビーチャムをミドラム城に呼び寄せて一緒に暮らしたいと願い出た。哀れな伯爵夫人は、夫の死後ハンプシャーのビューリ修道院の庇護所にひっそりと身を潜めていたのである。

しかし、世間から身を隠していたといえ、彼女は広大な故ウォーリック伯の遺産の半分に当たる旧ビーチャム家とデスペンサー家の所領を所有していたから、クラレンスはこれを自分の権利に対するリチャードの容喙だと疑って、この計画に猛反対した。ここに兄弟間に相続問題が再発した。故キング・メイカーの遺産相続問題は複雑で、国王の調停も難航したが、最終的には、伯爵夫人アン・ビーチャムの所領を兄弟で分割相続することで決着した。本来ならば、相続問題は伯爵夫人の死後の問題であるべきだが、早く自分のものにしたいという点では兄弟の意見が一致したものとみえる。とはいえ、法治国家のイングランドでは、王族といえども法を無視することはできなかった。そこで、頭のいいリチャードは、この問題を議会に訴えて、新たに法律を作ることによって、これを可能にしたのであった。

> 6 June 1474: confirmation, at the request of Richard Duke of Gloucester, of an act of Parliament to the effect that George Duke of Clarence and Isabel his wife, and Richard Duke of Gloucester and Anne his wife, daughters and heirs of Richard Neville late Earl of Warwick, and daughters and heirs apparent of Anne Countess of Warwick, should possess and enjoy, in the right of their wives, all possessions belonging to the countess as though she were naturally dead. (9)

文面から、これはリチャードの要請で、議会で制定された法律を確認したものであることがわかる。すなわち、「クラレンス公ジョージとその妻イザベルおよびグロスター公リチャードとその妻アンは、故ウォーリック伯の娘、相続人として、またウォーリック伯爵夫人の娘、相続人として、伯爵夫人が自然死した場合のように、夫人の財産のすべてを、妻の権利によって、所有するものなり」。哀れな伯爵夫人は、生存中にもかかわらず、死んだものとして、その財産のすべてを娘たちに譲る羽目になったのである。

こうして、ウォーリック伯夫人の遺産の約半分がリチャードとアンのものになった。これは一見公平に見えるが、クラレンスにとっては不満であった。もともと自分が独り占めするつもりであったから、その半分をリチャードに渡すということははなはだ不本意であった。それにリチャードはすでに、オクスフォード伯領など、敵対したランカスター派の貴族の所領を拝領しており、力関係ではリチャードのほうが有利であった。一時期、エドワード四世に叛旗を翻して、ランカスター派と結んだことのあるクラレンスの処遇としては、寛大すぎるほどであるとおもわれるのであるが、彼の不満はくすぶり続けた。これが嵩じて、4 年後の 1478 年、クラレンスの反乱にいたることは第 2 節で述べたとおりである。

ところで、クラレンスの死後、ウォーリック伯領がすぐにリチャードのものになったわけではなかった。ウォーリック伯領は代々男子が相続する慣習があり、相続資格人は他にもいたからである。それは、甥に当たるジョージ・ネヴィルで、彼との相続問題が解決して、北部の所領が完全にリチャードの手に渡ったのは、1483 年にジョージが死んだ後であった。ここまでにおよそ 12 年の歳月が必要であった。

シェイクスピアはもちろん、後世の年代記作者は、王位簒奪を狙ったリチャードが、ウォーリック伯の遺産を目当にアンを妻にし、邪魔なクラレンスを殺してウォーリック伯の所領を独占したあげく、最後には国王暗殺という大逆を犯したと解釈するが、それは明らかに、結果からの推論に過ぎない。ここで見るように、リチャードがウォーリック伯領を手にするまでには 12 年がかかっ

たという事実が、何よりも雄弁に「遺産乗っ取り説」を否定している。もちろん史実は、シェイクスピアが描くような、意表をつく求婚と女心の弱さが織り成す劇的な結婚ではなかった。一方、リチャードが、クラレンスに監禁されていたアンを救い出して結婚を申し込むという純粋なラヴ・ロマンスという説もにわかには受け入れがたい。常識的には、ウォーリック伯領の相続という大きな政治的問題を背景にして繰り広げられた二人の王子、しかも兄弟姉妹同士で結婚した二人の夫婦による、イングランド北部の実効支配権をめぐる葛藤と捉えるのが自然であろう。

Ⅲ

アンとリチャードの私生活については、他の中世貴族の生活同様に、詳しいことはほとんどわかっていない。二人が、1472 年の夏に結婚し、翌年、ヨークシャーのミドラム城で長男のエドワードが誕生したことが、資料からわかる程度である。

シェイクスピアにおいても、アンが直接姿を見せる場面は少なく、求婚の場面の次はリチャードの王位就任が決定した後である。そこでは、アンが戴冠式のためにウエストミンスター寺院に行くよう急がされるが、その顔に喜びはない。

And I in all unwillingness will go.
I would to God that the inclusive verge
Of golden metal that must round my brow
Were red-hot steel, to sear me to the brain!
Anointed let me be with deadly venom,
And die, ere men can say, God save the queen!　(10)

アンは、本来ならば人生の頂点であるはずの戴冠式という晴れがましい場を与えられたにもかかわらず、「ああ、この額を締めつけるはずの黄金の冠が灼熱

の鋼鉄であってあってくれればいい、式の参列者たちが王妃万歳と叫ぶ間もなく即座に死ねるように！」と、口をついてでてくるのは、悲しみと嘆きの言葉ばかりである。

Lo, ere I can repeat this curse again,
Even in so short a space, my woman’s heart
Grossly grew captive to his honey words
And proved the subject of my own soul’s curse,
Which ever since hath kept my eyes from rest;
For never yet one hour in his bed
Have I enjoy’d the golden dew of sleep,
But have been waked by his timorous dreams,　(11)

「それなのにどうでしょう、その呪いのことばを二度とくり返す間もなく、たちまちのうちに、私の女心は愚かにも彼の甘いことばのとりことなり、この身は自分自身の呪いの餌食となったのです」という台詞からわかるように、アンの苦しみは、あれほどリチャードを憎んでいたにもかかわらず、甘い言葉に誘われて結婚した自分自身である。また二人の結婚生活も、「彼を夫として以来、そのベッドにいて片時も眠りという黄金の露を味わったことはありません」と、安息がないことが示されている。マクベスがダンカンを殺して王座を奪ったことが、自らの「眠りを殺した」(12)　ように、「悪夢にうなされる彼のおかげで目を覚まされるのです」と、リチャードにも安らかな眠りはない。

シェイクスピアにおいては、アンはリチャードの犠牲者として描かれ、戴冠式というもっとも幸せな時期にも悲しみに沈む女性として描かれている。二人の結婚生活には「眠りという黄金の露」がない不幸なもので、最後に、「そのうえ、父がウォーリックであるために彼は私を憎んでいます。今にきっと私を殺すでしょう」(13)　という暗示的な言葉を残してアンは舞台から去る。

次にシェイクスピアから離れて、歴史的な資料をあたるが、その前に、この

あたりの事情を簡単に整理しておこう。

エドワード四世が死亡すると、13 歳のエドワードが王位に就き、グロスター公リチャードが護国卿として幼いエドワード五世を補佐することになった。しかし、対外的には慢性的なスコットランドからの脅威に加え、フランスとの対立は一触即発の状態にあって、バラ戦争の経験から、貴族たちの幼い国王をいただくことへの不安は増幅していった。一方、宮廷では、エドワード四世の時代に権力を二分していた王妃一派、つまりウッドヴィル＝グレイ一族と、同じくエドワード四世の側近であったヘイスティングス卿の対立が、エドワード四世という重石を失って一挙に表面化した。1484 年 4 月 29－30 日の政変は、ヘイスティング卿と組んだグロスター公リチャードによる宮廷革命の第一歩であった。ここで、王妃の弟リヴァース伯をはじめ、ウッドヴィル＝グレイ一族の主立った者は殺害もしくは逮捕された。次に、グロスターは第二次宮廷革命を断行し、そこでは先の政変の急先鋒であったヘイスティングス卿が処刑された。これによって、エドワード四世の時代の旧勢力は一掃されたことになる。その後、即位請願書の提出、民衆集会での推戴を経て、「エドワード四世はエリザベス・ウッドヴィルと結婚する前にエリナー・バトラーなる婦人と婚約していたために、エリザベスとの結婚は無効で、その子供は庶子である」ことを骨子とした、いわゆる「エドワード非嫡出法」が議会で可決された。これによってエドワード五世が廃位され、翌 6 月 26 日に、リチャード三世の即位式が挙行された。

この様子を『クローランド年代記』は次のように伝えている。

> The cardinal, Thomas Archbishop of Canterbury, was summoned and on 6 July following Richard of Gloucester received the gift of the royal unction and crowning in the conventual church of St. Peter at Westminster and at the same time his wife, Queen Anne, received her crown. From that day, while he lived, this man was called King Richard, the third after the Conquest. (14)

ここには、「カンタベリー大司教のトマス枢機卿が翌 7 月６日に召喚され、ウエストミンスターのセント・ピーター教会にて、グロスター公リチャードは聖油式と戴冠の儀を受けた」と書かれているが、ウエストミンスターのセント・ピーター教会はウエストミンスター寺院のことである。「同時に妻のアン王妃も冠を授けられた。この日から、生きている限り、この人物はリチャード三世、すなわちノルマンの征服以来三人目のリチャード王と呼ばれた」という記述から、アン王妃も一緒に戴冠したことがわかる。

すでに述べたように、リチャードとアンの間に 1473 年に長男エドワードが誕生してからは、リチャード自身もほとんどヨークシャーのミドラム城にいて、スコットランドからの脅威に備えるとともに、新しい領地の経営に余念がなかった。この時代のリチャードについては節を改めて詳述するが、彼は王妃エリザベス一派との抗争を避けて、ヨークシャーに引きこもり、故ウォーリック伯に忠誠を誓っていた領民の信頼を獲得するために全力を注いだ。このような真摯な努力が実って、戴冠式のころには領民の誰からも慕われる立派な領主となっていた。というわけで、リチャードの戴冠を誰よりも喜んでいたのは北部の人々であった。

リチャードのヨークへの帰還の様子を、『ヨーク市記録簿』は次のように記している。

> ...the king’s grace is in good health, and in likewise the queen’s grace, and in all their progress have been worshipfully received with pageants;　(15)

「国王陛下は健勝で、妃殿下も同じく健勝であられた」という一節に続く「人びとは、巡幸を華やかな行列を作り敬意を持って受け入れた」という文面から、国王となって帰還したリチャードに対するヨーク市民の歓迎ぶりが見て取れる。この歓迎ぶりが気に入ったのか、新王はヨークに長逗留して、市民の陳情を受け、市と市の貧民救済のために多額の寄付を寄せている。

このときの様子は、ポリドール・ヴァージルによっても紹介されている。そ

こでは、リチャードがヨークの市民達によって暖かく迎えられ、新しい王を一目見ようという群集がおしかけたことが紹介された後、次のような文面が続いている。

In which procession very solemnly set forth and celebrated by the clergy, king was present in person, adorned with a notably rich diadem, and accompanied with great number of noble men; the queen followed also with crown upon her head, who led by the hand her son Edward, crowned also with so great honour, joy and congratulation of the inhabitants, as in show of rejoicing they extolled King Richard above the skies...　(16)

「その中を行列は厳かに出発し、聖職者によって儀式が執り行なわれた。王は大変高価な王冠を身につけて、多数の貴族を従えて登場した。王妃もまた頭上に王冠を頂いて従い、息子のエドワードの手を引いていた」。この文面からははっきりしないが、聖職者はヨーク大司教と推測され、まばゆいばかりの王冠をいただいたリチャードが多くの貴族を従えて現れたことがわかる。また、「リチャード王を激賞する歓呼の声に見られるような市民の敬意、歓喜、祝福の中で同じく名誉あるある冠を授けられていた」という次の一節から、エドワードが王の正式の後継者である皇太子（プリンス・オヴ・ウエールズ）としてお披露目されたことがわかる。

この様子は『クローランド年代記』をみればもっとはっきりと分かる。

Whishing therefore to display in the North, where he had spent most of his time previously, the superior royal rank, which he acquired for himself in this manner, as diligently as possible, he left the royal city of London and passing through Windsor, Oxford and Coventry, came at length to York. There, on a day appointed for the repetition of his crowning in the metropolitan church, he presented his only son, Edward, whom, that same day, he had created Prince of Wales with the insignia of

the golden wand and the wreath; and he arranged splendid and highly expensive feasts and entertainments to attract to himself the affection of many people. (17)

「彼は、自分がほとんどの時間を過ごしていた北部の人たちに、国家の最高位に就いた自分をできる限り良く見てもらいたいと願って、王都であるロンドンを発ち、オクスフォードからコヴェントリーを通って、ついにヨークへと着いた」という前文に続く次の一節に注目したい。「ここで、王都の教会で行われた戴冠式をもう一度行うべく指定された日に、彼は一人息子のエドワードを紹介した。彼はその日すでに皇太子のしるしである金の杖と冠を授けて皇太子号を授けていたのである」。つまり、リチャードは、ロンドンのウエストミンスター寺院で、カンタベリー大司教の手で執り行われた戴冠式を、ヨークでヨーク大司教の手でもう一度再現して見せたのである。北部の人びとは常に南部の人たちに対して対抗心を持っており、ヨーク大司教にとってはカンタベリー大司教と同列に置かれることが何よりも栄誉であった。このような北部人の感情を知り尽くしたリチャードのきめ細かな配慮であった。次の、「そして、自らとおおくの人々の愛情をひきつける為に盛大かつ高価な祝宴と余興を催したのであった」という文から、エドワードに皇太子号を授与し、その披露をエドワードの生まれ故郷で盛大に行ったことがわかる。皇太子号の授与式をロンドンではなく、ヨークで行い、市民を巻き込んで盛大な披露宴を催したのは、第一次宮廷革命、第二次宮廷革命を通じてリチャードの手足となって働いた北部の兵士たちに対する彼のねぎらいでもあったろう。

さて、以上見てきたように、これらの資料には、シェイクスピアのように悲しみに打ちひしがれるアンの様子を描いたものはない。ほとんどがリチャード三世の戴冠式、およびさらに華々しくヨークで再現された戴冠式と、皇太子としてお披露目したエドワードに関する記述である。アンにとっても一粒種のエドワードの皇太子就任と居城ミドラム城への帰還がうれしくないわけがない。リチャードはアンの気持ちに気配りしたか、北部の人びとの歓迎ぶりに応えるためか、ヨークに長逗留したが、このような北部への肩入れが一方で、南部の

人びとの反感を買い、敵対するランカスター派がロンドンで跳梁跋扈することを許したのは歴史の皮肉である。

Ⅳ

アンの死もリチャード三世にまつわる謎のひとつである。

シェイクスピアにおいては、アンの死は明確にリチャードの仕業として描かれている。国王となったリチャードではあるが、王位は決して安泰ではない。フランス王の後ろ盾を得た政敵リッチモンド伯ヘンリーが、エドワード四世の娘エリザベスとの縁組みを前提に王位を狙っていることを知ると、その望みをうち砕くために、リチャードは自らが姪のエリザベスを妻にしようとする。そのために妻のアンが邪魔になる。

リチャードは腹心のケイツビーに命じて、「妃のアンが重病にかかり、死にそうだ」(18)　という噂をまき散らさせる。シェイクスピアにおいては、リチャード自身がうわさの震源であり、後のアン暗殺の布石として、意図的に流布させていることに注目したい。そして自分は、「妃を一歩も外に出さぬように手をうっておく」(19)　と、いよいよアンの抹殺に取り掛かることが示されている。この場面は物語が終盤にかかり、リチャードが一気に悪の階段を駆け上がる場面である。リチャードは矢継ぎ早に命令を下した後、ぼんやりと聞いているケイツビーに 「もう一度言うぞ、妃のアンが重病で死にそうだと言いふらしてこい、いますぐにだ」と念を押す。(20)　そして、次の場面ではリチャードがアンを邪魔にする理由が明らかにされる。

I must be married to my brother’s daughter,
Or else my kingdom stands on brittle glass.　(21)

「おれは兄の娘と結婚せねばならぬ」とリチャードが兄エドワード四世の娘エリザベスとの結婚を望んでいることが明らかになる。その理由は、「さもない

とわが王国はもろいガラスの上にあるようなものだ」という曖昧なもので、観客は、リチャードがたいした理由もなく妻を殺す悪漢であるという印象を深める。

シェイクスピアではこの時点で物語展開が一気に加速し、ロンドン塔内での幼いエドワード五世と弟のヨーク公暗殺という山場に入る。観客の同情はもっぱら哀れな王子たちに注がれているが、その間に、「妃のアンはこの世からおさらばさせてやった」(22)　と、さりげなくアンの死が知らされる。

こうして邪魔者を始末したリチャードは、ロンドン塔で暗殺した二人の王子の姉であるエリザベスにその触手を伸ばす。

Now, for I know the Breton Richmond aims
At young Elizabeth, my brother’s daughter,
And, by that knot, looks proudly o’er the crown,
To her I go, a jolly thriving wooer.　(23)

「残るは兄エドワードの幼い娘エリザベスだ、ブリタニーにいるリッチモンドもあの娘を狙い、その縁で王冠を手に入れようと高望みをしている」。この時点で初めて、リッチモンド伯、すなわち後のヘンリー七世もエリザベスとの結婚を望み、その縁で王位を狙っていることが明らかになる。シェイクスピア劇では、バッキンガム伯の反乱や、リッチモンド伯率いるランカスター軍の上陸など、政治的な大詰めに関心が移るが、シェイクスピアは死んだアンを終幕でもう一度亡霊として登場させる。それはボズワースでの決戦前夜の夢のなかで、リチャードによって殺された者たちが次々と現れてリチャードを呪い、リッチモンドを励ます。

Ghost.　[‘to Richard’], Richard thy wife, that wretched Anne thy wife,
That never slept a quiet hour with thee,
Now fills thy sleep with perturbations:
To-morrow in the battle think on me,

And fall thy edgeless sword: despair and die!　(24)

この場面は、自分の野心を達成するために多くの人々を殺害したリチャードに、その犠牲となった人々を次々に見せ付ける、いわば「リチャードの悪業の総集編」ともいえる場面である。ここに、「お前の妻が、お前のそばにいて、一時も安らかに眠ったことのなかったみじめなアンがお前の眠りを不安でかき乱してやる。明日の戦場で、私のことを思い起こし、その手にするなまくら刀をとり落すがいい。絶望して死ね」と、アンをリチャードの犠牲者として明確に位置づけることによって観客はリチャードの罪の深さを再確認して、極悪人リチャード像を完成させるのである。リチャードという巨大な悪の渦が周りの罪も無い人々を次々に飲み込んでゆくという『リチャード三世』の構図を、シェイクスピアはこのような形で舞台の上で表現して見せたのである。

さてこのように、シェイクスピアでは、悪漢リチャードという劇中人物をいかに魅力的に描ききるかに重点がおかれているために、他の登場人物の役割はおのずから限定されたものとなる。歴史劇とはいえ、こうした中では歴史的事実がある程度捨象されることはやむをえないことかもしれない。

次に舞台から離れて、古い資料からアンの死にまつわる部分をあたってみよう。アンの死に関する資料は極めて少ないが、シェイクスピアが『リチャード三世』を書くときに種本とした『ホリンシェッドの年代記』に、注目すべき言及がある。

[Richard] procured a common [IV.ii] rumor (but he would not haue the author knowne) to be published and spred abroad among the common people, that queene was dead; to the intent that she, taking some conceit of this strange fame, should fall into some sudden sicknesse or greeuous maladie:　(25)

「(リチャードは)王妃が死んだという噂を外国や庶民の間に広めさせたが、(だれが言ったかを知らせることは許さなかった)。その意図は、彼女がその奇

妙な評判を聞いて、突然病気になるか、重い病に陥るだろうと思ったからである」。この文面から、ホリンシェッドでは、情報源がわからないように配慮しつつ、リチャード自身がうわさを流したと考えていることがわかる。シェイクスピアでは、「重病」といううわさを流しておいて殺害するので、微妙に違ってはいるが、すべてがリチャードの周到な計画であったという点が共通である。シェイクスピアの解釈はホリンシェッドを踏襲したものであろう。いずれにせよ、ホリンシェッドのこの記述から、エリザベス朝中期にはリチャード三世自身がうわさを流した上で、アンを暗殺したという話が一般に流布していたと判断される。

次にこれより早いポリドール・ヴァージルをみてみよう。

> For first he lost Edward his only son the third month after he had been made Prince of Wales; after that a conspiracy was contrived by means of Henry Duke of Buckingham... (26)

ここにはきわめて重要な事柄が記されている。「最初に、エドワードがプリンス・オヴ・ウエールズになって三か月で、王はこの一人息子をなくし、その後でバッキンガム公ヘンリーによる陰謀が企てられた」。すなわち、リチャードとアン夫婦の期待を一身に背負った一粒種のエドワード皇太子が、ヨークにおける華やかな披露宴の後、わずか三か月で急逝したのである。諸侯を呼んで、自分に万一のことがあったときはエドワードを後継者として盛り立てることを誓言させたばかりであったが、その証文も今は不要になった。たまたま滞在中のノッティンガム城でこの知らせを聞いたリチャードとアンは「突然の悲報に、随分長い間狂乱状態であった」という。(27)　この短い『クローランド年代記』の引用からだけでも二人が受けた衝撃の大きさが想像できる。実際、夫妻の悲しみと落胆は尋常ではなく、ことにアンはこれを機に体調をくずしていったといわれている。エドワードの誕生から１０年余り、アンには他に子供がなく、文

字通り生きがいであり、また王妃の座を不動にする証でもあったからである。

もちろんバッキンガムの反乱は政治的な大問題ではあったが、国王が後継者を失うということは、もっと大きな問題をはらんでいた。長いバラ戦争の間に、貴族や有力な商人たちは、将来後継者を巡って必ず争いが起きることを予見していた。このために王国の将来には、にわかに暗雲が垂れ込め、民心に動揺が走った。バッキンガムの反乱劇の背景にもこのような民衆の不安があったことは十分想像できる。シェイクスピアでは、後継者を失ったことで国民の間に不安が広がったという事実に触れないままで、リチャードはアンを暗殺し、エリザベスに触手を伸ばすために、リチャードの心の闇の深さが強調される。だが、歴史上のリチャードは悲しみに沈んでばかりいられなかった。この事情をジョン・ラウスは次のように記している。

> Not long after... the young Earl of Warwick, Edward, eldest son of George Duke of Clarence, was proclaimed heir apparent in the royal court.... Later he was placed in custody and Earl of Lincoln was preferred to him...　(28)

「ほどなくして、クラレンス公ジョージの長男、ウォーリック伯、エドワードが宮廷において正式な後継者として宣言された」。一人息子を失ったリチャードは兄クラレンス公ジョージの長男エドワードを後継者としたのである。この甥は父の後を継いでウォーリック伯に序爵されてはいたが、幼かったうえ、ときどき精神的なもろさを露呈することがあったので、民心の動揺を防ぐどころか、逆に不安を助長させてしまった。「後に彼は拘留されて、リンカン伯が選任された」というラウスの記述からわかるように、リチャードはやむなく彼を拘留し、代わりに姉エリザベスの長男で、すでに成人していたリンカン伯ジョン・ドゥ・ラ・ポールを改めて指名し直し、この問題の払拭に務めた。

このような状況の中で、1485 年 3 月、王妃のアンが死亡した。ポリドール・ヴァージルは「王妃は、悲しみもて送られたにせよ、毒殺されたにせよ、死亡した。」(29)　と述べているが、ここで注目すべきは、アンの死に、「悲しみも

て送られた」と「毒殺された」と２説が併記されていることである。ヴァージルでは誰が毒殺したかについては触れられていない。

ヘンリー七世の肝いり入りで歴史書を執筆したとはいえ、歴史家としての節度を失わなかったヴァージルとは違って、ジョン・ラウスは個人的な感情から記録を残すことに何のためらいもなかった。

And Lady Anne [Richard III's] queen, daughter of Earl of Warwick, [the king] poisoned.　(30)

「ウォーリック伯の娘、レイディ・アン　(リチャード三世妃)を(国王が)毒殺した」とここにはリチャードがアンを毒殺したことが明記されている。ラウスは歴史的事件の順序を間違えたり、リチャード三世在世中と死後では 180 度見解を変えたりしたために、その見解は信頼度が少ないとはいえ、テューダー王朝の初期に「リチャードによるアン毒殺」を明言している点に注目したい。

次にこれらの中で一番古い『クローランド年代記』を見てみよう。

A few days later the queen began to be seriously ill and her sickness was then believed to have got worse and worse because the king himself was completely spurning his consort's bed. Therefore he judged it right to consult with doctors. What more is there to be said?　(31)

「その数日後、王妃は難しい病気にかかった。王自身が王妃と寝室をともにすることをまったく避けていたことから、病はさらに悪化していったと思われる。」ここで扱っている時期は、1484 年のクリスマスの祝宴の後で、アンはこの時期に病気にかかったことがわかる。やがて病気はますます重くなっていった。医者に相談しても、「これ以上何も言うべきことはない」、つまり、寝室をともにしないこと以外には何ら手立てがないことが示されている。

さて、近代の歴史家・作家の多くが、アンの死は結核によるものであると考えている。その代表的な例は P. M. Kendall で、彼は 1955 年に発表した *Richard III* のなかで、アンとイザベルの姉妹が共に若くして死んだことや、一人息子のエドワード皇太子も幼少時に死んだことなど慎重に考慮した上で、結核という結論に達したのであった。イザベルの直接の死因は産褥によるもであったとしても、結核による合併症が主な原因だったというのである。クリスマス頃から兆候が現れ、1485 年の 3 月 16 日に死亡したこと、安静以外に効果的な治療法がないこと、感染を恐れて侍医が王に寝室に入らないように進言したことなどを現代の知識から判断すれば結核に違いないというのである。なお、リチャードがアンの寝室に出入りしなかったことが、毒を飲ませているとの噂につながっていったことを銘記すべきである。病人の体力が徐々に失われてゆく結核の進行過程が、毒を飲んだときの症状と良く似ていることがこの噂を生んだものであろう。ちなみに、姉イザベルの死に際しても毒殺が疑われたことを思い起こして欲しい。ところで、すでに 19 世紀には Caroline A. Halstead が結核説をとり、さらに古くは 1619 年に George Buck も結核説を唱えているので、これは新しい解釈というわけではない。そして、結核説をとる多くの人々が数少ない手がかりとして注目しているのが、『クローランド年代記』の記述なのである。

年代記は、「3 月半ばの日食の日、アン王妃は死亡し、王妃の葬儀にふさわしい栄誉をもってウエストミンスター寺院に埋葬された」(32)　と結んでいる。葬儀に際してリチャードは人目をはばかることなく泣き、3 日間にわたって部屋に閉じこもっていたといわれている。

V

アンが死んだ後、にわかに政治問題として浮上してきたのはリチャードの再婚という問題であった。「妻が死んで間もないのに再婚話とは不謹慎な」と考えるのは現代人で、当時は、よほど幼いか耄碌していない限り再婚は成人の

義務であった。独身者は疑いの目で見られ、女性は魔女とみなされることさえあった。(33)

その前に、相手のエリザベスの結婚問題について簡単に説明しておかねばならない。話は一年ほど前に遡る。リチャードの第一次宮廷革命のときに、ヘンリー四世妃エリザベスは、子供たちを引き連れてウエストミンスター寺院に庇護を求めた。この後、リチャードが王位を継承して、混乱は収まったのだが、エリザベスと二人の娘たちは頑として庇護所を出ようとはしなかった。そこでリチャードは公文書を送って、彼女たちの身分を保証した。そのなかに以下のような娘たちの結婚に関する文言が入っている。

> And that I shall marry such of them as now be marriageable to gentlemen born, and give each of them marriage lands etc to the yearly value of 200 marks...And over this that I shall yearly [pay] for exhibition and finding of Elizabeth Grey...the sum of 700 marks...And moreover I promise them that if any surmise or evil report be made to me of them... by any person...then I shall not give thereunto faith nor credence... (34)

ここには、「また、いまや適齢期である彼女達を、紳士として生まれたものたちと結婚せしめ、結婚持参領を付与し、年間 200 マークを与えるものなり、、、。さらに、エリザベス・グレイに、年金および維持費として、年間 700 マークを支払うものなり。なおかつ、彼女らについて、何らかの憶測、ないし悪意ある報告が、誰によって出されようとも、余はそのようなものを一切信用、信頼しないことを約束する」という具体的な約束が記されている。当時は結婚年齢が低く、特に女性は十代半ばで結婚するのが当たり前であった。エリザベスは１７歳、まさに適齢期であった。そこでリチャードは身分にふさわしい生活を送るに足るだけの費用を保証すると同時に、娘たちの結婚も保障して、ウエストミンスター寺院から出ることを促したのである。こうして彼女達は社会に復帰し、娘たちの結婚は王自らの約束によって、政治的なアジェンダとなっていった。

このような事情のなかでアン王妃が死亡したのである。リチャードはまだ 35 歳、当然再婚が政治問題として浮上した。新たな後継者が誕生すれば後継者問題も解決し、民心の不安も霧消するからである。ポリドール・ヴァージルは、アンの死後、結婚問題が浮上したことについて次のように述べている。

> The king, thus loosed from the bond of matrimony, began to cast an eye upon Elizabeth his niece, and to desire her in marriage; but both because the young lady herself, and all other, did abhor the wickedness so detestable, he determined therefore to do everything by leisure, forasmuch as he was overwhelmed with pinching cares on every hand; for that some men of name passed over daily unto Henry, others favoured secretly the partners of conspiracy...　(35)

「王は、こうして結婚生活の頚木から解き放たれ、姪のエリザベスに秋波を送り、彼女との結婚を望むようになった」という文面から、ヴァージルは、アンの死がリチャードにとって好都合であったと考えていたことが分かる。さらに、「この若い女性も、他のすべての人びともその不道徳を忌み嫌っていたので、また、八方に難問を抱えていたので、彼はすべてをじっくり時間をかけてやろうと決心した。」とあることから、エリザベス自身がこの結婚を望まず、他の人びとも叔父と姪の近親結婚という不道徳を嫌っていたので、また、八方に難問を抱えていたので、事を急がなかったことがわかる。結婚話はこれでいったん中断されたものの、この間に民心は離れていった。「有力者が毎日ヘンリーのほうに走り、陰謀の共犯者に密かに好意を示した」という記述が示すように、姪との結婚話がいかにリチャードへの信頼を揺るがしたかが分かる。

次に『クローランド年代記』によれば、リチャードは早くから、フランスに亡命中の政敵、リッチモンド伯ヘンリーが、故エドワード王の娘であるヨークのエリザベスと結婚して、その縁で王位を伺っていることを知って頭を痛めていた。(36)

ちなみに、ヘンリーはランカスター派の旗頭ではあったが、父方の系譜をた

どればウエールズの旧家にすぎず、母のマーガレットがボーフォート家出身でジョン・オヴ・ゴーントにつながり、かろうじて王家の血筋につながるものの、その根拠ははなはだ曖昧であった。というのも、ボーフォート家はリチャード二世とヘンリー四世の二度にわたって王位継承権を否定され、イングランドの王位を継ぐ資格のない家系だったからである。ヘンリーが王位に就くには是が非でも王家の血筋の濃い女性と結婚せねばならなかった。こうして、ヨークのエリザベスに白羽の矢が立てられたのである。

再び『クローランド年代記』によれば、リチャードは 1484 年のクリスマスの頃から、エリザベスとの結婚が念頭にあったようである。彼が「自らの王位を安定させ、ライヴァルの希望を打ち砕くにはこれ以外に方法はない」(37)　と考えていたときに、アンが病気になったと説明されている。そして、彼が行動を起こしたのはアンが死亡した 1485 年の 3 月以降である。

> Eventually the king’s plan and his intention to marry Elizabeth, his close blood-relation, was related to some who were opposed to it and, after the council had been summoned, the king was compelled to make his excuses at length, saying that such a thing had never entered his mind. There were some at the council who knew well enough that the contrary was true.　(38)

「ついに王が、近親のエリザベスと結婚するという計画、ないし、意志を、何人かに話したが、彼らはそれに反対であった。委員会が招集された後、王はついに、そのようなことは考えたこともなかったと釈明せざるを得なかった。委員会の中には、本当はまったくこの逆であることをよく知っている人が何人かいた。」　この記述から分かるように、リチャードの本心はヨークのエリザベスと結婚したかったが、何人かに相談したところ反対されたために、これを断念し、委員会を招集してその場で公式にこの結婚を否定せざるを得なかった。これに続く文章ではさらに一歩踏み込んで、その内実まで明らかにしている。

Those who were most strongly against this marriage and whose wills the king scarcely ever dared to opposed were in fact Sir Richard Ratcliffe and William Catesby, squire of the body. These men told the king, to his face, that if he did not deny any such purpose and did not counter it by public declaration before the mayor and commonalty of the city of London, the northerners, in whom he placed the great trust, would all rise against him, charging him with causing the death of the queen...in order to complete his incestuous association with his near kinswoman, to the offence of God. (39)

「この結婚にもっとも強く反対し、王もその意志には反対できかねる人物は、王の側近のリチャード・ラトクリフとウイリアム・ケイツビィであった」という記述から、リチャードが相談した相手がラトクリフとケイツビィであり、この二人の側近が結婚を思いとどまるよう説得した様子がうかがえる。さらに文章は次のように続く。「二人は王に面と向かって、もし王がそのようなことを、ロンドン市長、および市民の前など公の場所で、否定せず、論駁しないならば、彼がもっとも信頼している北部の人々はみな、彼に反旗を翻し、神に反して近親者と相姦関係を結ぶために王妃を死に追いやったとして彼を責めるであろう。」つまり二人は、アン王妃を慕い、リチャードがもっとも信頼している北部の領民の信頼をつなぎとめるためにはこの結婚話を正式に否定すべきであると進言したのである。ここで注目すべき点は、二人は「もし(リチャードが)このうわさを放置しておけば、人々が王は姪と結婚したいがために王妃を死に追いやったと思うので、公式の場でこれを否定すべきであると述べていることである。やがてこの杞憂は現実のものとなり、ラウスのようにリチャードがアンを毒殺したと公然と述べるのもが現れたことはすでに見てきたとおりである。

さて以上は、すべてリチャード自身がエリザベスとの結婚を望んだと解釈するものであるが、なかにはこれはすべてランカスター派のプロパガンダであると考える者もいる。すなわち、リチャード三世が王位に就いた時の法律的な根拠は、エドワード四世の子供は庶子であるとの、いわゆる「エドワード非嫡子法」

によっている。そして、エリザベスはこの法律によって王女といての身分を失っているために、リチャードが彼女と結婚してもまったく王権の強化にはならないばかりでなく、自らの王位の正当性すら危ういものにする。リチャードがそんなばかげたまねをするはずがないというのである。確かにエドワード四世の弟であるリチャードにとって、ローマ法王の許可を貰うだけでも大変な近親者との結婚は、決して良い話ではない。しかし、ライヴァルのヘンリーの鼻をあかすにはこの計画は実に効果的である。実際、ランカスター派はこのうわさを聞いて仰天した。もしそれが実現すればヘンリーの王位はまったく絶望になるからである。そこで、それを阻止するためになりふりかまわずスキャンダルを流した。(40)　もちろんこれに対抗してヨーク派もスキャンダルを流したことは想像に難くない。

古い資料の中にも、ランカスター派の中傷であることを示す資料が残っているので見てみよう。

> ...and there have been long discussion and much uninformed talk among the by evil-disposed persons, who have...sown these rumours to the very great displeasure of the king, showing how the queen was poisoned by consent and will of the king, so that he might marry and have to wife the Lady Elizabeth, eldest daughter of his brother, late king of England...　(41)

「悪意ある人々は長きに渡って、内緒の論議を続けた、、、そして王が、大変不愉快に思われたことには、彼らは、故イングランド王で、彼の兄の長女レディ・エリザベスと(王が)結婚して妻にすることができるように、妃は王の同意と意志のもとに毒殺された、という噂をまき散らしていたのである。」 この記述からわかるように、リチャードがエリザベスと結婚したいために妃のアンを毒殺したといううわさが流され、リチャードが大変不愉快な思いをしていた。

これが本当に根も葉もないランカスター派の中傷であれば、うわさはすぐ

に静まったであろう。しかし事実は、逆にうわさがうわさを呼んで全国にまで拡大したのである。その裏には、エリザベス自身が絡んだ一つの事件があった。

1484 年のクリスマスにヨークのエリザベスは、アン王妃の衣装とまったく同じ生地で作った衣装を纏って晩餐会に出席するという事件があった。王妃アンが重病で死の床にあるときに、王妃と同じ衣装のヨークのエリザベスが晩餐会で脚光を浴びる。これは、リチャードがアン王妃亡き後はエリザベスを後釜にすえるとのメッセージであると人々は解釈したのである。この衣装の着用はアンの好意によって許されたものであったという。なお『クローランド年代記』には、アン王妃とエリザベスは顔も体形が良く似ており、二人が衣装を交換し合っていたと書かれているからが、エリザベスはアン王妃の衣装を着て晩餐会に出たのかもしれない。(42) なお、「エリザベス自身がこの結婚を望み、リチャードが私の唯一の喜びであると語り、母のエリザベスもこれを認めていた」(43)　との話もある。いずれにせよ、これを機にエリザベスとの結婚の噂が一気に加速した。リチャードがエリザベスに厳重に注意を与え、彼女をヨークシャーのシェリフ・ハットン城―ここには他の甥や姪も暮らしていた―に送り返したことから、この事件が世間に与えた衝撃の大きさがわかるであろう。

というわけでうわさは、ますます拡大して、ついにリチャードもこれを無視することができなくなった。このため、ロンドンのクラーケンウエルに貴族や市民の代表を集めて、その前で公式にうわさを否定するという前代未聞の事態になった。

> the king sent for and had before him [the] mayor and aldermen. And in the great hall, in the presence of many of his lords and many other people, he showed his grief and displeasure, and said it never came into his thought or mind to marry in such manner, nor was he pleased or glad at the death of his queen but a sorry and as heavy in heart as a man would be...　(44)

「やがて王は、市長や参事会員を自らの前に呼び寄せた。そして、グレイト・ホールにおいて、多数の貴族、その他の人々の面前で、王は悲しみと不快を示しつつ、このような形での結婚など考えたこともなかったし、その気持ちもないと語った。彼は、王妃に死を喜んだことも、嬉しく思ったこともなく、悲しみ、一人の男として心を重くしているといった」という文面からは、リチャードが躍起になって噂を否定し、亡き妻アンに対する愛情を吐露した様子が分かる。

この情報戦は明らかにランカスター派の勝利であった。テレビもインターネットもなかった時代、情報は専ら人の口から口へと伝わったが、そんなときにはもっともらしい理屈よりもスキャンダルの方に人気が集まるのは今も昔もおなじである。たちまち、うわさがロンドンばかりでなく全国に広まった。リチャードは、ヨークを含めて全国の主だった都市に手紙を送って、うわさに惑わされないように警告しなければならなかった。そこでは、ロンドンや各地で反動勢力がリチャードの人格を誹謗するうわさの種を撒き散らしているとの警告を伝え、「多くのわが臣下の悪口をいわんがために、また、わが臣下に心変わりをさせんがために、あるものはビラを貼り、あるものはデタラメなうわさをまき散らしている」(45)　と具体的な形でランカスター派のプロパガンダが示されている。

リチャードが、本当にエリザベスとの結婚を考えていたのか、あるいはこれがまったく中傷にすぎなかったのかは分からない。しかし、この問題がリチャードに与えた影響は大きく、ヴァージルのいうように、多くの有力者がランカスター派に走り、ヘンリーに同情が集まったことは確かである。一方、情報戦に敗れたリチャードにとっては、神の見ている戦場での決着が唯一の道となってゆく。ボズワースの戦いの四か月前の出来事であった。

Notes

(1)　Shakespeare, William, *Richard III*, I, ii, 17-24.

(2)　ibid., I, ii, 174-79.

(3)　ibid., I, ii,180-83.

(4) Pronay, Nicholas, and Cox, John ed., Translated, *Crowland Chronicle Continuation (1459-1486),* Alan Sutton Publishing, Stroud, 1986, p.131-33.

(5) Ibid., P.133.

(6) A.L.Rowse, *Bosworth Field & the Wars of the Roses*, Macmillan and Company, London, 1966, p.176.

(7) Dockray, Keith, *Richard III— A Source Book*, Sutton Publishing Ltd., Gloucestershire, 1997. p. 26.

(8) Ibid.

(9) ibid.

(10) op.cit., *Richard III*, IV, i, 58-63.

(11) ibid., IV, ii, 78-85.

(12) Shakespeare, William, *Macbeth*, II, ii,36.

(13) op.cit., *Richard III*, IV, i, 86-7.

(14) op.cit, *Crowland Chronicle Continuation*, p.161.

(15) op.cit., Dockray, p.72.

(16) ibid., p, 71.

(17) op.cit., *Crowland Chronicle Continuation*, p.161.

(18) op.cit., *Richard III*, IV.ii. 51-2.

(19) ibid., IV. ii. 53.

(20) ibid., IV. ii. 57-8.

(21) ibid., IV. ii. 61-2.

(22) ibid., IV. iii. 39.

(23) ibid., IV, vi, 40.

(24) ibid., V, iii, 159-63.

(25) Nicoll, Alladyce and Josephine, ed., *Holinshed's Chronicle as Used in Shakespeare's Plays*, J.M. Dent & Sons Ltd. London, 1927, p.157.

(26) op.cit., Dockray, p.101.

(27) op.cit., *Crowland Chronicle Continuation*, P. 171.

(28) op.cit., Dockray, p.100.

(29) ibid., pp. 102.

(30) ibid., 100.

(31) op.cit., *Crowland Chronicle Continuation*, P. 175.

(32) ibid.

(33) Pounds, N.J.G., *The Culture of the English People*, Cambridge UP., 1944, P. 308.

(34) op.cit., Dockray,102.

(35) ibid., 102.

(36) op.cit., *Crowland Chronicle Continuation*, p. 171.

(37) ibid., p.175.

(38) ibid.

(39) ibid.

(40) Cheetham, Anthony, *The Time and Life of Richard III*, Weidenfeld and Nicolson, London, p.175.

(41) op.cit., Dockray, p. 103.

(42) op.cit., *Crowland Chronicle Continuation*, p. 175.

(43) Neillands, Robin, *The Wars of the Roses*, Brockhampton Press, London,1992.p.199.

(44) op.cit., Dockray, p.103.

(45) Pollard, A.J., *Richard III and the Princes in the Tower*, Alan Sutton Publishing, Gloucestershire, 1991, P.167.

(本文がラテン語の資料からの引用は、編纂者によって翻訳された英語で引用した。シェイクスピアの作品の訳は小田島雄志による。)